

## 信 行 要 文 ③

第十三回 法華講夏期講習会 第三期

（平成二十八年六月十九日）

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会の第三期に当たり、皆様方には大変お忙しいなかの御登山、まことにおめでとうございます。恒例によりまして、テキストに記載しております「信行要文」について、お話をしていきたいと思えます。

本日は二ページの五『寿量品文底大事』からお話をさせていただきます。

### 5 寿量品文底大事

**文の底とは久遠下種の法華經、名字の妙法に、今日熟脱の法華經の歸入する處を志し給ふなり。されば妙樂大師釈して云はく「雖脱在現具騰本種」云云。（御書一七〇七 七行目）**

この『寿量品文底大事』は、日蓮大聖人様から日興上人へ与えられた相伝書で、御述作の日時については定かではありません。

内容につきましては、『開目抄』の、

「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底に秘してしづめたまへり」（御書五二六 七行目）

の御文を挙げて、文底の大法とは三大秘法の南無妙法蓮華經であると御教示あそばされております。

『開目抄』のこの御文については、総本山第二十六世日寛上人が『三重秘伝抄』に、「釈の文に三意を含む。初めには権実相對、所謂『但法華經』の四字是れなり、次には本迹相對、所謂『本門寿量品』の五字是れなり、三には種脱相對、所謂『文底秘沈』の四字是れなり。是れ則ち浅きより深きに至り次第に之れを判ず。譬えば高きに登るには必ず卑きよりし、遠くに往くには必ず近きよりするが如し云云（中略）応に知るべし、『但法華經』の『但』の字は是れ一字なりと雖も意は三段に冠するなり。謂わく、一念三千の法門は一代諸經の中には但法華經、法華經の中には但本門寿量品、本門寿量品の中には但文底秘沈なり云云。故に三種相對は文に在って分明なり」（六卷抄 七行目）

と仰せられています。

つまり、一念三千の法門について、まず権実相對して法華經迹門、次に本迹相對して本門寿量品、さらに種脱相對して寿量品文底の三重に、この一念三千の法門が秘伝されることを御教示あそばされているのであります。

既に皆さん方は重々御承知と思えますが、権実相對というのは、爾前權經と、実教である法華經との比較相對であります。このうち、爾前權經には十界互具が明かされてお

らず、『開目抄』に、

「一念三千は十界互具よりことはじまれり」（御書 五二六<sup>ノ</sup>）

と仰せのように、法華經迹門において二乗作仏が明かされ、十界互具して一念三千が説き顕されたのであります。したがって、一念三千が説かれている法華經が勝れて、説かれていない爾前権經は劣ると、勝劣を判ずることができるのです。これが「但法華經」と言われた意でありまして、権実相對に当たるのであります。

次は本迹相對であります、法華經二十八品のうちの、前半の十四品が迹門、後半の十四品が本門であり、この迹門と本門との比較相對であります。『開目抄』に、

「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといえどもいまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮かべるににたり」（同 五三六<sup>ノ</sup>）

と仰せのように、迹門でも一念三千が一往は説かれておりますが、仏の本地が明かされていないために、真の一念三千とは言えないのです。それが、本門の如来寿量品で発迹顕本がなされ、仏の本地が明かされました。そして、本有常住の真の一念三千が説かれたわけでありまして、したがって、迹門と本門とを比べると、本門が勝れ、迹門が劣ることになるのです。これが「但本門寿量品」という意で、本迹相對に当たるのであります。

最後が種脱相對であります、法華經本門の中心は如来寿量品でありますから、これに文上脱益と文底下種の二つの法門があるのであります。この文上脱益と文底下種とを比較するとき、『本因妙抄』に、

「一代応仏のいきをひかえたる方は、理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を、脱益の文の上と申すなり。文底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず、直達正觀・事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり」（同 一六八四<sup>ノ</sup>）

と仰せのように、文上脱益の一念三千は理の上の法であり、迹に過ぎないのです。それに対して、文底下種の一念三千は直達正觀、事行の一念三千であって、独一本門の南無妙法蓮華經であり、故に文底下種が勝れ、文上脱益が劣るのであるということです。このことが「但文底秘沈」とお示しあそばされた意でありまして、種脱相對に当たるのです。

今の御文のなかに「直達正觀」とありましたが、これを読み下しますと「直ちに正觀に達する」となります。この正觀とは、正しく法を觀ることで、すなわち仏の悟りの境地、即身成仏、あるいは速疾頓成と同じ意味です。

つまり、爾前の諸經で説かれたところの歴劫修行に対しまして、寿量品に、

「速成就仏身（速かに仏身を成就す）」（法華經 四四三<sup>ノ</sup>）

と説かれますように、法華經では歴劫修行によらず、速やかに仏の境地に達することができるのであります。

この歴劫修行と申しますのは、爾前の諸經の菩薩あるいは二乗が無量劫にわたって修行することでありまして、これは迂回とも言いますが、直達正觀・速疾頓成に対する言葉です。歴劫の劫は長い時間のことでありますから、劫を積み重ねる、つまり何年も何十

年も、一生も二生も、さらに長い時間がかかって、ようやく成仏に至るとというのが、爾前権經の成仏相です。それに対しまして法華經は、あくまでも即身成仏、その身そのままに成仏を遂げることができるというのです。

したがって、末法こんじ今時におきましては、ただ三大秘法の南無妙法蓮華經を受持信行することによって、直ちに仏の境地を得ることができる、成仏することができるということでもあります。

また御文には「事行の一念三千」とありましたが、これは末法の寿量文底下種益の独一本門のことをおっしゃっているのではありません。つまり、一往の立て分けとしては、迹門で理の一念三千が説かれ、本門で事の一念三千が説かれてはおりますけれども、文底下種の事の一念三千から見れば、迹門の理の一念三千は当然のこと、法華經文上本門の事の一念三千も、理の一念三千に過ぎないということです。

文底下種の仏法は、常住不変の究極の真理、すなわち一念三千の法理を事実の上に体现した本尊を直ちに信受・修行することによって成仏をするわけですから、それを事行の一念三千と言うのであります。

さて、テキストに載せた御文について申し上げますと、初めに「**文の底とは久遠下種の法華經、名字の妙法に**」とあります。これは文底についておっしゃっているのですが、この「久遠下種」というのは久遠の昔に下種を受けたことであり、下種というのは仏様が衆生に成仏の因となる種子を下すことを言います。

しかるに、爾前の諸經におきましては始成しじょうしやうがく正覚、つまり仏様自身が今の世にお生まれになり、今世において始めて正覚、さと覺りを開かれた、つまり始めて正覚を成じた仏であると説かれているのであります。これが、法華經の迹門に来ますと、化城喩品で、三千塵点劫の過去において仏と衆生との縁が結ばれたと説かれるのであります。そして、さらに本門の寿量品に来ますと、五百塵点劫の成道、つまり三千塵点劫よりもさらに昔の久遠実成が明かされたのであります。

しかし久遠といえども、これがある一定の時を指している以上、永遠の仏身觀とは言えないのであり、この久遠下種というのは、釈尊成道の根源の法である久遠元初の南無妙法蓮華經の下種を指すわけであります。そこで『三世諸仏総勘文教相廢立』には、

「釈迦如来じんでんごう五百塵点劫の当初、凡夫そのかみにて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座に悟りを開きたまひき」(御書 一四一九ご)

と仰せられ、仏様が久遠元初に名字凡夫の位で即座開悟そくざかいごされ、その所証の法を久遠名字の妙法と言うのです。そしてまた、これを下種の本因妙とも申し上げるのであります。この久遠名字本因妙の教主釈尊の本地を顕されたのが、末法の御本仏、宗祖日蓮大聖人様であります。故に『百六箇抄』に、

「我が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり。其の教主は某そなり」(同一六九五そ)

と記されております。

したがって、このあと「今日こんにち熟脱の法華經の帰入する處を志し給ふなり」と仰せであります。この「帰入」というのは帰るとか元へ戻るという意味であり、つまり教えを受けて誤った法を捨て、正法に帰伏・帰依するの意であります。すなわち、久遠名字の

妙法こそが、釈尊文上脱益の法華經の歸入するところの本法であるとの仰せであります。

次に「されば妙樂大師釈して云はく『**雖脱在現具騰本種**』云云」とあるなかの「雖脱在現具騰本種」の文は、

「脱は現に在りと雖も具に本種を騰ぐ」（学林版文句会本上 三六〇）

と読みます。これは妙樂大師の『法華文句記』の文でありまして、釈尊の仏法では、所化の大衆は法華經如来寿量品の法門を聞いて得脱をするのでありますが、その成道の本因を尋ねてみると、実に久遠の下種が蔵されていることが解るわけであります。

このことについて、日寛上人の『当流行事抄』には、

「靈山一会の無量の菩薩（中略）文底秘沈の種本を了して久遠元初の下種の位に立ち還って本地難思の境智の妙法を信ずるが故に、皆悉く名字妙覺の極位に至るなり」

（六卷抄 一七二）

とあります。また、同じく日寛上人の『文底秘沈抄』には、

「脱益は是れ一往なり、故に『雖脱在現』と云い、下種は是れ再往なり、故に『具騰本種』と云うなり云云」（同 七三）

と記されております。

このように、無始無終にわたって衆生を救済する法は、まさに下種の妙法のみであり、たとえ迹仏が説く法によって成仏をしたとしても、その本因は久遠元初下種の南無妙法蓮華經を覺知したが故なのであります。

したがって『秋元御書』に、

「三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏に成り給へり」（御書 一四四八）

と説かれているのであります。「三世」というのは過去・現在・未来のことで、時間の全体を言い、「十方」とは四方・四維に上・下を足したもので、空間の全体を示しております。つまり、すべての仏様は、この「妙法蓮華經の五字を種として」仏に成られたのであり、この妙法蓮華經こそが、久遠元初の根本の法なのであります。

だから、ここから振り返って見れば、三世十方の仏が唱えて仏に成ったのと同じ妙法を今、私どもは唱えているのでありますから、その功德たるや甚大なるものがあるということです。そして、久遠元初下種の妙法こそが、まさしく我々すべての衆生の即身成仏の本種子となるのであります。

以上のように「雖脱在現」とは、釈尊の説かれる寿量品を聞いて在世の衆生はことごとく得脱したという一往の義であり、「具騰本種」とは、在世の衆生も久遠元初の下種を覺知して成仏を遂げたという再往の義なのであります。

次に、第六番の『御義口伝』を拝読します。

## 6 御義口伝

いま今日蓮等の類聖靈を訪ふ時、法華經を誦し、南無妙法蓮華經と唱へ奉る時、題目の光無間に至って即身成仏せしむ。廻向の文此より事起こるなり。（御書一七二四二行目）

この『御義口伝』は『本因妙抄』や『百六箇抄』と並んで、大聖人様の奥義を教示あそばされたところの極めて重要な相伝書であります。相伝書というのは、今日におきましては『平成新編御書』のなかにも収録されておりますけれども、昔は門外不出と言われていたほど、重要なものであります。

したがって、この『御義口伝』につきまして、総本山第十七世日精上人の『家中抄』には、

「聖人山居のちの後門弟子の請いにより法華經の御講釈あり。御弟子衆数多ありといえども日興達士の撰せんにあたり給いしかば、章安所録の天台の章疏しょうしよに習って聖人の説法を記録し給う事合がつして二百二十九箇条、其の外度度の聞を集めて日興記と名づく。是れ聖人編集の註法華經に就いての口伝なり」(日蓮正宗聖典 六一三)

とあります。つまり、この『御義口伝』は『日興記』という別名があるように、大聖人様の御内証の立場からの法華經の講義を第二祖日興上人が筆録され、大聖人様の御いんか允可を得たものであり、まさに秘伝の書、相伝の書と言われている理由が、ここにあります。

また全体が上下二巻からなり、内容は、最初に「南無妙法蓮華經」について説き、次に上巻に序品第一から涌出品第十五まで、下巻に如来寿量品第十六から勧発品第二十八まで、および開經の無量義經と結經の觀普賢經について説かれています。そして、別伝として「廿八品の最大事」、さらに「廿八品は悉く南無妙法蓮華經の事」が収録されております。

各条では、初めに法華經二十八品ならびに開結二經中の文を挙げて、天台・妙樂の釈を引き、次に「御義口伝に云はく」として、末法の寿量文底下種の法門が明かされています。

この『御義口伝』には、色々な有名な御文がありますけれども、なかでも有名な御文を挙げますと、

「如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類たぐいの意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり。寿量品の事の三大事とは是これなり」(御書 一七六五)

と説かれております。あるいはまた、

「当品は末法の要法あらに非ざるか。其の故は此の品は在世の脱益なり。題目の五字計り当今の下種なり。然れば在世は脱益、滅後は下種なり。仍よつて下種を以て末法の詮せんと為す云云」(同 一七六六)

ともあり、この『御義口伝』のなかには非常に大事な御文が多く記されております。

では、本又に入りますと、拝読の箇所は「序品七箇の大事」中の「第五 下至阿鼻地獄の事」のなかの一文であります。この「下至阿鼻地獄」は「下、阿鼻地獄しもに至る」と読みます。

初めに「今日蓮等の類たぐい聖靈しょうりょうを訪ふ時」とあるなかの「聖靈」とは精靈、亡くなった方の靈魂れいこん、御靈みたまのことで、これは死後の生命を指しております。また「訪ふ時」というのは、死者の靈なぐさを慰めて冥福を祈ることを言います。

この時は「法華經を讀誦し、南無妙法蓮華經と唱へ奉る時、題目の光無間に至って即身成仏せしむ」と仰せであります。まさに題目の功德力は廣大無辺にして、下は無間地獄にまで至り、即身成仏せしめるとおっしゃっているのです。

この「即身成仏」というのは、衆生が凡夫の身そのままで仏に成ることです。法華經以前の諸經におきましては、例えば悪人は善人に身を変じ、また女人は男子に生まれ変わった上で、長期の修行、これを歴劫修行と言いますが、長い長い間、仏道修行をして、ようやく三十二相・八十種好を具えた仏に成ると説かれていたのです。しかし、法華經では、そういった歴劫修行によらずして、妙法の功力によって、凡夫の肉身そのままの姿で成仏を得る、即身成仏ということが説かれるのであります。

例えば、法華經の提婆達多品では、八歳の竜女の即身成仏が明かされております。すなわち、伝教大師は『法華秀句』に、

「能化所化俱に歴劫無し、妙法の經力を以て即身に成仏す」

とおっしゃっており、また天台大師の『法華文句』には、

「仏の受けたもうこと疾きとは果を獲ること速かなるなり（中略）胎經に云く、魔梵積女は皆身を捨てず身を受けずして、悉く現身に於て成仏することを得」（学林版文句会本下 六六頁）

と示されております。このなかの「魔梵積女」というのは、魔王・梵王・帝釈・女人のことで、これらは身を捨てずに、あるいは身を受けずに「現身」その身そのまま成仏することができる、と仰せられているのであります。

ですから、妙楽大師の『法華文句記』には、

「若し即身成仏せずんば、此の竜女の成仏及び胎經の偈云何が通ずるや」（同 六七頁）

とおっしゃっているのです。

つまり、この即身成仏の義は法華經によって立てられた、まことに大事な法門ですが、この法華經で説くところの即身成仏は、まさしく妙法蓮華經の經力によるものであります。この妙法蓮華經の經力によって、十界の衆生それぞれの者が、当体を改めずに成仏がかなえられると説かれているわけであり、

これを今日的に言うならば、まさに本門戒壇の大御本尊を至心に信ずることによって、我々は、いかなる者であったとしても、必ず即身成仏がかなうのであります。けれども、一つだけ条件があります。それは、信心がなければ成仏はかないません。この信心が最も大事なところであり、

頭のなかでは解っていても、それが身体として動かなければだめなのです。例えば、朝夕の勤行が尊い、すばらしいと思っても、実際に勤行をしなければだめです。

折伏も同じです。折伏の功德は極めて大きい。けれども、頭で考えていただけでは理の仏法であって、私達はそれを行ずることによって初めて、その大きな功德を実際に頂戴することができるのです。

ですから、理と事の違いをしっかりと見極めて、朝夕の勤行、そして日々の折伏を行じていく、つまり自行化他の信心に励んでいくことが非常に大事なことです。

本門戒壇の大御本尊を至心に信じ、自行化他の仏道修行をすることによって、我々の

即身成仏がかなうのです。このことは、一人ひとりがよくよく銘記しなければなりません。つまり、大聖人様の仏法は理の仏法ではなく、事の仏法であり、この事を事に行ずるところが事行の一念三千でありますから、これを行じていくところに大きな意味が存するのであります。

次に「廻向えこうの文こ此こより事起ここるなり」と仰せであります、そもそもこの「廻向」というのは、廻はめぐらす、向は差し向けるという意味です。つまり、自らが仏道修行をして得たところの功德を回し転じて、衆生に向けて施し与えることを言うのであります。したがって、その元になる自らの仏道修行がなければ、これは回向にならないのです。要は、一人ひとりがしっかりとお題目を唱えて自らの功德を積み、その功德を回し向けることが大事であります。

これを具体的に言うならば、三大秘法の大御本尊を信じ、その功德を父母、兄弟、先祖等の菩提に回し向けることであります。

したがって、旧訳くやくの華嚴経には、

「此の菩薩摩訶薩は、一切の諸もろもろの善根を修習する時、彼の善根を以て、是くの如く回向し、此の善根功德の力をして一切の処に至らしむ」

と説かれており、また天台大師の『摩訶止観』には、

「一切の賢聖の功德広大なり。我今随喜す、福亦広大なり。衆生は善無し。我善を以て施す。衆生に施し已って正に菩提に向う。声を廻らして角に入るに、響き聞こゆること則ち遠きが如し」(学林版止観会本下 一九三頁)

とおっしゃっているのであります。つまり、衆善を修して回向をすれば、功德が甚大であり、至誠しせいが通ずるとの意であります。

この回向には色々な解釈がありますがけれども、三種の回向ということがあります。さらに、それを分けた十種の回向ということもあるのですが、この三種の回向は『大乘義章』に説かれる菩提回向・衆生回向・實際回向の三つを言います。

初めの菩提回向とは、自ら積んだ善根功德を、自己の悟りに差し向けることであります。

二番目の衆生回向とは、積んだ善根功德を他の者、つまり衆生の利益に差し向けることです。

三番目の實際回向とは、回向そのものに執われないで、そこに平等真実の理を悟ることを言います。

この三種の回向はいずれも重要であります、基本的には、自ら積んだ善根功德を他の衆生の利益に差し向けることが肝要であります。つまり、自分の功德を回し向けるということから、やはり自らの強盛な信心がなければならぬのです。

それでは、次に七番目の『御義口伝』の御文を拝読します。

## 7 御義口伝

此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱これ是なり。如来とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。今日蓮等の類いまの意は、

総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那<sup>だんな</sup>なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり。寿量品の事<sup>じ</sup>の三大事とは是なり。(御書一七六五<sup>ぢ</sup>九行目)

これは『御義口伝』の「寿量品二十七箇の大事」の最初に出てくる「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」のなかの一文であります。

皆さん方もよく御承知の通り、法華經は釈尊一代五十年の説法中、真実最勝最尊の教説にして三説<sup>さんせつちよう</sup>超過<sup>か</sup>の大法、随自意<sup>ずいじい</sup>の仏説、釈尊出世の本懐として説かれた、諸經中王の經典であります。その法華經のなかにおいて、本門正宗分として説かれたのが、いわゆる一品二半です。この一品二半とは涌出品第十五の後半品と如来寿量品第十六の一品全部と、そのあとに説かれた分別功德品第十七の前半品であり、その中心は寿量品であります。

これにつきましては「五重三段」という御法門が説かれております。この五重三段は、文底下種の南無妙法蓮華經を顕示するに当たって『觀心本尊抄』に詳説された御法門で、「三段」とは序分・正宗分・流通分<sup>るつう</sup>の三つを言うのであります。

初めの「序分」とは、一經の序論です。そして「正宗分」というのは、一經の本論で、「流通分」というのは、一經の利益を挙げて正説の流通を勧める部分です。よく「序・正・流通」と言われるように三段に分けられ、さらに「五重三段」と言うように、それが五重に配当されております。

第一重が「一代一經三段」で、釈尊一代の説法を一つの經と見立てて、これを序・正・流通の三段に分けますと、序分は法華經以前の諸經で、正宗分は法華經の前に説かれた無量義經一卷と、法華經八巻と、觀普賢經一卷の、合わせて十巻です。そして流通分は涅槃經等になります。

第二重が「法華經一經三段」で、序分は法華經の開經である無量義經と法華經の序品であります。正宗分は、方便品第二から分別功德品第十七のなかの十九行の偈までの十五品半であり、流通分は、同じく分別功德品の現在の四信から普賢菩薩勸発品第二十八までの十一品半と、結經である觀普賢經であります。

第三重が「迹門熟益三段」で、序分は無量義經と法華經の序品、正宗分は方便品第二から授学無学人記品第九までの八品、流通分は法師品第十から安樂行品第十四までの五品であります。

第四重が「本門脱益三段」で、序分は涌出品第十五の前半品、正宗分は涌出品の後半品と寿量品第十六、そして分別功德品第十七の前半品で、先程言いました一品二半、つまり略広開顯の一品二半であります。そして、流通分は分別功德品の後半品から觀普賢經までになります。

そして最後、第五重として「文底下種三段」が説かれますが、その序分は文底体外の辺における釈尊ならびに十方三世諸仏の無数の經々です。そして、正宗分である寿量品文底の一品二半が説かれたあと、その体内に入った釈尊等の十方三世諸仏の無数の經々が流通分になるのです。

この五重三段は、浅い教えからだんだんと深いところへ順序立てて説かれたものであ

りまして、一代<sup>しょうぎょう</sup> 聖教の中心は法華經、その法華經の中心は方便品から分別功德品前半品の十五品半であると示されます。さらに、その法華經に迹門と本門の二つがありますから、それぞれに三段を立てられて、まず迹門の最要は方便品から人記品までの八品であり、本門の<sup>すうよう</sup> 枢要は略広開頭の一品二半にあることが示されております。そして、文底下種の法門より見れば、法華經本門如来寿量品の文底の一品二半、大聖人様御内証の寿量品が正宗分となり、その所詮の義意は文底下種の南無妙法蓮華經なのであります。

さて、寿量品につきまして、大聖人様は『開目抄』に、

「一切經の中に此の寿量品ましまさずば、天に日月の無く、国に大王の無く、<sup>さん が たま</sup> 山河に珠の無く、人に<sup>たましい</sup> 神のなからんがごとくしてあるべき」(御書 五五三<sup>ぎ</sup>)

と仰せられております。また、同じく『開目抄』のなかに、

「寿量品をしらざる諸宗の者は畜<sup>ちく</sup>に同じ。不知恩の者なり」(同 五五四<sup>ぎ</sup>)

とおっしゃっております。つまり、法華經が一切經のなかで最も勝れ、釈尊出世の本懐たる所以は、結局、この寿量品がましますが故であると示されているのです。

故に『可延定業御書』には、

「法華經の一代の聖教に超過していみじきと申すは寿量品の<sup>故</sup>ゆへぞかし」(同 七六一<sup>ぎ</sup>)

と仰せられております。

そこで、この寿量品についてももう少し述べますと、遠くは見宝塔品の三箇の勅宣に对应、近くは涌出品におきまして釈尊が、他方の国土より来集した<sup>しゃつけ</sup> 迹化の菩薩達が滅後娑婆世界の弘通を願い出たのを、

「<sup>や</sup> 止みね、<sup>ぜんなんし</sup> 善男子、<sup>なんだち</sup> 汝等が此の經を護持せんことを<sup>もち</sup> 須いじ。所以は何ん。我が娑婆世界に、<sup>おのずか</sup> 自ら<sup>ごうがしや</sup> 六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り。一一の菩薩に<sup>まかさつ</sup> 各<sup>いちいち</sup> 六万恒河沙の眷属有り。是の諸人等、能く我が滅後に於て、護持し、誦誦し、広く此の經を説かん」(法華經 四〇八<sup>ぎ</sup>)

と制止して、上行菩薩を上首とする六万恒河沙の地涌の菩薩を、大地の底から呼び出されたのであります。

しかるに、この菩薩達は皆、<sup>こんじき</sup> 金色にして三十二相を具え、無量の光明を放つ、まことに立派な、威風堂々とした菩薩でありました。

このことを『開目抄』に、

「釈尊に第一の御弟子とを<sup>ふげん</sup> ぼしき<sup>もんじゆ</sup> 普賢・文殊等にも<sup>似</sup> なるべくもなし。華嚴・方等・般若・法華經の宝塔品に来集せる大菩薩、大日經等の<sup>こんごうさつた</sup> 金剛薩埵等の十六の大菩薩なんども、此の菩薩に対当すれば<sup>みこう</sup> 彌猴の群中に帝釈の来たり給ふがごとし。山人に<sup>やまがつ</sup> 月卿等のまじわれるにことならず。<sup>ふしよ</sup> 補処の<sup>みろく</sup> 弥勒すら<sup>なお</sup> 猶迷惑せり。何に<sup>いか</sup> 況んや<sup>いわ</sup> 其の<sup>いげ</sup> 已下をや」(御書 五五〇<sup>ぎ</sup>)

とあります。

つまり、現れ出たところの六万恒河沙の菩薩方は、釈尊のお弟子の普賢・文殊という菩薩方がおられますけれども、それとは「<sup>えざ</sup> なるべくもなし」比べものにならない、さらに華嚴等の会座や今の法華經の会座に居並ぶ大勢の菩薩達とも比べものにならない、とおっしゃっております。

この御文のなかの「獼猴」とは猿のことですが、居並ぶ迹化・他方の菩薩達と、本化の地涌の菩薩方とを比べるならば、猿の群れのなかに帝釈天が来られたようなものだとされているのです。

また「山人」というのは山中に住む身分の低い者という意味であり、「月卿」とは公家さんのことで、公家さんと山中に住む人とでは比べるべくもないという意味であります。そのように全く格の違う地涌の菩薩方の威風堂々とした姿を見た一会の大衆は、たいへん驚いたのであります。

そして「補処」というのは、一生補処のことでありまして、今の一生は迷いの世界に縛られているが、次生には仏の処を補う位になる、つまり地位を継ぐべきことが決まっている菩薩を言うのであります。この一生補処の弥勒菩薩ですら、なお迷い惑ったということです。したがって、弥勒菩薩以下の菩薩達も、この地涌の菩薩を見て、みんな驚いたということでありまして。

さらに次下に、

「此の千世界の大菩薩の中に、四人の大聖<sup>だいしょう</sup> ます。所謂、上行・無辺行・浄行・安立<sup>あんりゅう</sup> 行なり。此の四人は、虚空<sup>こくう</sup> 霊山<sup>りょうぜん</sup>の諸大菩薩等、眼もあはせ心も<sup>及</sup>をよばず。華嚴経の四菩薩、大日経の四菩薩、金剛頂経の十六大菩薩寺も、此の菩薩に対すれば翳眼<sup>えいげん</sup>のもの、日輪<sup>にちりん</sup>を見るがごとく、海人<sup>あま</sup>が皇帝に向かひ奉るがごとし。太公等の四聖の衆中にありしににたり。商山の四皓<sup>しこう</sup>が恵帝<sup>けいてい</sup>に仕へしにことならず。巍々堂々として尊高<sup>ぎぎ</sup>なり。釈迦・多宝・十方の分身<sup>ふんじん</sup>を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし」(同前)

と仰せであります。

このなかの「翳眼」というのは、曇って、かすんだ目のことであります。また「四聖」というのは、声聞・縁覚・菩薩・仏のことです。

また「商山の四皓」というのは、中国・秦代の末に国乱を避けて商山に入った、東園公<sup>とうえんこう</sup>・綺里季<sup>きりき</sup>・夏黄公<sup>かこうこう</sup>・角里先生<sup>かくり</sup>の四人の有名な隠士<sup>いんし</sup>のことです。そして「恵帝」というのは中国前漢第二代の皇帝で、父は高祖<sup>りゅうほう</sup>・劉邦<sup>りゅうほう</sup>であります。五歳の時に父が漢王となり、六歳で太子となりましたが、高祖が亡くなった翌年、即位しました。以後、長安城の修築整備などを行いましたが、性格が柔弱<sup>にゅうじやく</sup>だったために、母の一族に実権を握られて、二十三歳で亡くなったと言われます。

ここに仰せのように、地涌の大菩薩は、まさに「普賢・文殊等にもにるべくもな」く、「獼猴の群中に帝釈の来たり給ふがごと」き、威風堂々たる菩薩方であったのであります。この地涌の菩薩方を見た弥勒菩薩は、いまだかつて見たことがない、これらの菩薩方の姿を見て疑念を抱き、一座の大衆を代表して「この威風堂々とした菩薩方は、いかなる所から、いかなる因縁によって出現されたのですか」と、釈尊に尋ねられたのであります。

釈尊は、この弥勒菩薩の疑問に対して、

「我今実語を説く<sup>いま</sup> 汝等<sup>なんだち</sup>一心に信ぜよ我久遠より<sup>このかた</sup> 来<sup>これら</sup> 是等の衆を教化せり」(法華経 四二二)

と答えられ、仏様の寿命が長遠であることを、ほぼ説き顕されたのであります。つまり、

釈尊はインドに出現せられて、十九出家、三十成道と思われていたのですけれども、この寿量品の会座において、実は私は久遠の昔に成道していたと明かされたのであります。

それが、まさにこの略開近顛遠の御文でありまして、これら威風堂々とした菩薩達は、私が久遠以来、教化してきた弟子であると答えられて略開近顛遠を示し、今まで釈尊は始成正覚の仏、このインドに出現して始めて正覚を成じた仏だと思われてきたことに対して動執生疑せしめ、久遠の本地を示唆されたのであります。

そして断疑生信、この疑いを断じて信を生ぜしめるために、寿量品の広開近顛遠が説かれたのであります。

すなわち、釈尊は寿量品におきまして、

「汝等諦かに聴け、如来の秘密神通の力を。一切世間の天、人、及び阿修羅、皆今の釈迦牟尼仏は、釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり。然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」(同 四二九)

と説かれたのであります。つまり釈尊は、王子である身分を捨てて城を出、そして菩提樹のもとで悟りを開かれた仏様だと思われていた。その始成正覚の思いを打ち破って、気の遠くなるような昔に仏に成った、いわゆる久遠実成の仏であることを明かされたのであります。

このことについて、大聖人様は『開目抄』に、

「『然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり』等云云。此の文は、華嚴經の三処の『始成正覚』、阿含經に云ふ『初成』、浄名經の『始坐仏樹』、大集經に云ふ『始十六年』、大日經の『我昔坐道場』、仁王經の『二十九年』、無量義經の『我先道場』、法華經の方便品に云ふ『我始坐道場』等を、一言に大虚妄なりとやぶるもんなり」(御書 五五二)

と仰せられております。つまり、この寿量品における久遠の開頭、すなわち広開近顛遠は、爾前権經における仏身に対する認識を「大虚妄なり」と否定をして、根本から変えたものであったのです。

また、この久遠の開頭に当たって本因・本果・本国土の三妙が説かれて、これによって事の一念三千の法門が明かされ、一切衆生の成仏の原理が示されるに至ったのであります。ということは、この寿量品は法華經の中心・肝要なる一品であるばかりではなく、一代五十年の眼目たることが明らかであります。

さらに『開目抄』に、

「一念三千の法門は但法華經の本門寿量品の文の底に秘してしづめたまへり」(同 五二六)

と仰せの通り、この寿量品の文底に久遠元初の事の一念三千が秘沈されていることを明かされているのであります。

さて、テキストに載せた御文に入りますと、初めに「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱是なり」とあります。

この段の御文は、今の御文の前に、

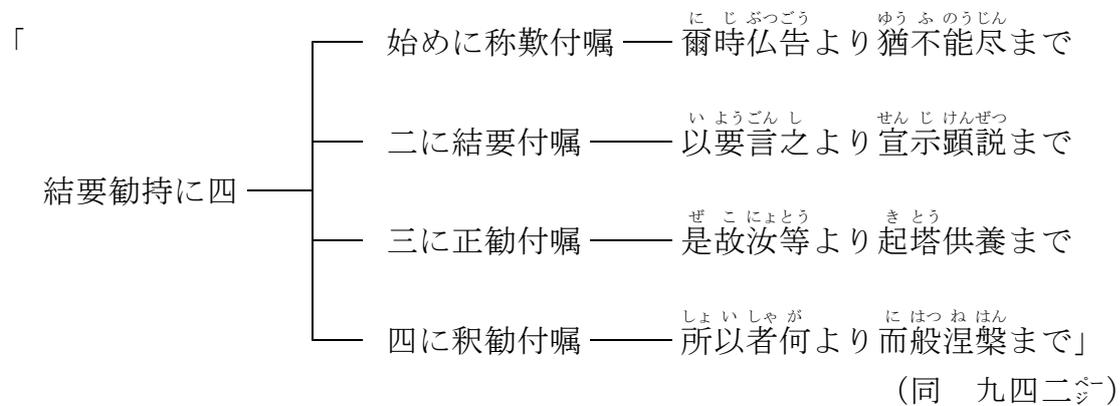
「第一 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事」(同 一七六五)

とありますように法華經壽量品の題号を説き明かされており、「此の品の題目は日蓮が身に当たる大事なり」というのは、法華經本門壽量品は末法御出現の大聖人様のために説かれたことを明かされています。

すなわち、釈尊は神力品において上行菩薩に妙法蓮華經を付嘱されましたが、その付嘱の内容は壽量品に説かれているのであります。つまり、壽量品において南無妙法蓮華經をお説きあそばされ、それを神力品において付嘱されたのです。しかして、この妙法蓮華經は事の一念三千自受用無作三身であり、これを一言に南無妙法蓮華經と称せられたわけであります。

また「神力品の付嘱」とは、釈尊が神力品において上行菩薩に対して行った四付嘱のことです。その四付嘱というのは、しょうたん 称歎付嘱・けつちよう 結要付嘱・しょうかん 正勸付嘱・しやっかん 釈勸付嘱の四つであります。

『上行菩薩結要付嘱口伝』には、



と記されております。

このように口でお話ししましても、なかなか解らないことと思いますが、この四付嘱の内容は天台大師の『法華文句』に準拠してありまして、宗門から刊行している『妙法蓮華經並開結』を御覧いただくと、今、私の話していることがお解りになるとおもいます。お帰りになりましたならば『法華經』の五一三ページを開いていただいて、下の段の訓読の右肩に小さな文字で書かれてある「称歎付嘱」などの書き込みを御覧いただきたいと思ひます。

この神力品の四付嘱につきまして、日寛上人の『依義判文抄』には、

「称歎付嘱とはほつたい法体である本門の本尊の功德を称歎すること、結要付嘱とは本門の本尊を付嘱すること、正勸付嘱とは本門の題目をかんしやう勸奨すること、釈勸付嘱とは本門の戒壇を勸奨することである」(六卷抄 一〇二<sup>㊦</sup>取意)

と教示し、この四付嘱の全体を「結要付嘱」と総称されております。

さて、このうちの「以要言之」以下の結要付嘱の文は「四句の要法」とも言われます。

すなわち、

「よう要を以て之を言わば、如来の一切のしやう所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切のぞう秘要の蔵、如来の一切の甚深じの事、皆此の經に於てせん じ けんぜつ宣示顕説す」(法華經 五一三<sup>㊦</sup>)

と説かれる四句の御文に法華經すうようの枢要を結んで、末法弘通のために上行菩薩をはじめと

する本化四菩薩に付嘱されたのです。

『三大秘法抄』を見ますと、

「問ふ、所説の要言の法とは何物ぞや。答ふ、夫<sup>それ</sup>積尊初成道より、四味三教乃至法華經の広開三顯一の席を立ちて、略<sup>りやくかいごんげんのん</sup>開近顯遠を説かせ給ひし涌出品まで秘せさせ給ひし処の、実相証得の当初<sup>そのかみ</sup>修行し給ふ処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」(御書 一五九三<sup>〇</sup>)

と説かれておりまして、名字凡夫の仏が久遠元初に修行し証得した妙法蓮華經を、末法出現の日蓮大聖人様が三大秘法として建立された、これが結要付嘱の正体であり、本尊付嘱とも言うのであります。

したがって、日寛上人の『依義判文抄』には、

「本尊付嘱とは、即ち是れ如来の一切の名体宗用は、皆本門の本尊、妙法蓮華經の五字に於て宣示顯説する故に『皆於此經』等と云うなり。此の本尊を以て地涌千界に付嘱する故に『其<sup>そ</sup>の<sup>すうへい</sup>枢柄<sup>と</sup>を撮<sup>しか</sup>って而して之れを授与<sup>こ</sup>す』と云う、豈本尊に非ずや」(六卷抄 一〇二<sup>〇</sup>)

と述べられております。御文のなかの「枢柄」とは、主要にして根本となるもの、という意味であり、すなわち法華經の肝心である南無妙法蓮華經を指します。

また『三大秘法抄』には、

「末法に入って今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なり。名体宗用教の五重玄の五字なり」(御書 一五九四<sup>〇</sup>)

と説かれておりますように、神力品の結要付嘱の体は妙法の五字であり、この妙法は神力品において上行菩薩に付嘱されたわけでありますから、既にそれは積尊のものではなく、上行菩薩のものなのであります。したがって、これを『御義口伝』に、

「此の妙法蓮華經は積尊の妙法には非ず。既に此の品の時上行菩薩に付嘱し玉ふ故なり」(同 一七八三<sup>〇</sup>)

と仰せられているのであります。この上行菩薩とは日蓮大聖人様の垂迹<sup>すいじやく</sup>のお姿であり、その本地は久遠元初自受用報身如来であられます。よって神力品の付嘱とは、文底觀心の立場から見れば、積尊より御本仏日蓮大聖人様に妙法が渡ったという儀式になり、さらに言えば、妙法を御本仏にお返ししたという意味にもなるのであります。

ですから『三大秘法抄』に、

「此の三大秘法は二千余年の当初<sup>そのかみ</sup>、地涌千界の上首として、日蓮<sup>たし</sup>慥かに教主大覺世尊より口決せし相承<sup>くけつ</sup>なり。今日蓮が所行は靈鷲<sup>りょうじゆせん</sup>山の稟承<sup>りょうじゆせん</sup>に介爾計<sup>けにばか</sup>りの相違なき、色も替はらぬ寿量品の事の三大事なり」(同 一五九五<sup>〇</sup>)

と明かされております。

また『百六箇抄』には、

「久遠名字<sup>いらい</sup>已来本因本果の主、本地自受用報身<sup>すいじやく</sup>の垂迹<sup>すいじやく</sup>上行菩薩の再誕、本門の大師日蓮<sup>せんよう</sup>詮要す」(同 一六八五<sup>〇</sup>)

と仰せであります。

さらに『御義口伝』には、

「一經とは本迹廿八品なり。唯四<sup>ただ</sup>とは名用体宗の四なり。枢柄とは唯題目の五字なり。

授与とは上行菩薩に授与するなり。之とは南無妙法蓮華經なりと云へり。今日蓮等の類弘通の南無妙法蓮華經は体なり心なり、廿八品は用なり廿八品は助行なり。題目は正行なり、正行に助行を撰すべきなり」(同 一八〇五)

と述べられています。

さらに『観心本尊抄』には、

「此の本門の肝心、南無妙法蓮華經の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付嘱したまはず、何に況んや其の已外をや。但地涌千界を召して八品を説いて之を付嘱したまふ。其の本尊の為体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇土上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く、十方の諸仏は大地の上に処したまふ。迹仏迹土を表する故なり」(同 六五四)

と、肝心の御法門が示されており。

このあとにも、まだテキストに載せた御文が残っており、中途半端になってしまいましたけれども、時間になりますので、本日はここをもって終了いたします。

最後のところは少し急いで申し上げましたので、解りにくいところがあったかと思いますが、お帰りになりましたら、もう一度、テキストをお読みになっていただければと思います。また、解らないところがあれば、所属寺院の御住職によく聞いてみてください。

本日は相伝書の御文について申し上げましたけれども、いずれも文底観心の大事な御法門が説かれております。

ただし、やはり大聖人様の仏法は理ではなくして事、つまり理屈ではなくして行うということが大事でありますから、本日の講義を聞いて、また普段の信心の上から御本尊様のすばらしさを感じたら、今度はそれを多くの人達に教えていくということ、すなわち折伏をしていくことが大事です。

今日、政界・財界の混迷や世界のあらゆる情勢から見て、私達が本当に大聖人様の仏法をもって広宣流布をしていかなければならないと思います。皆さん方も今日の様々な姿を見て、やはり大聖人様の仏法でなければ真の世界平和はないとお感じになっていらっしゃるのではないのでしょうか。

であれば、我々はそれを一つひとつ行動に移す、つまり私達一人ひとりが、一人ひとりを折伏することが肝要だと思います。まさに理ではなくして事、これが広宣流布の戦いであろうと私は思います。

どうぞ、お帰りになりましたら、皆様方一人ひとりが、本年度の誓願達成のため、また遠くは未来広布のために、力を尽くして折伏に励んでいただきたいと思います。本日の講義を終わらせていただきます。